



発行所  
カトリック長崎大司教区  
本部事務局  
〒852-8113  
長崎市上野町10-34  
カトリックセンター内  
TEL 095(846)4246  
FAX 095(842)4460

## 長崎とアジアの教会

大司教 高見 三明

日本と韓国で毎年交互に行われている「日韓司教交流会」が、今年（去る）11月11日～13日に長崎で行われました。韓国・日本双方からそれぞれ14名ずつの司教たちが参集し、大司教館を主会場にして親交を深めることができました。

### キリストはアジア生まれ

教皇様がその使徒的勧告『アジアにおける教会』の中で指摘しておられるように、神の救いの計画は、旧約時代からアジアを舞台として展開されました。

アブラハムは、ウル（イラク南部）の出身でしたが、神の招きを受けてパレスチナに移住し、彼の子孫も神の約束に従ってそこを祖国としました。そして、救い主は彼らの中から生まれたのです。

教皇様のことばを借りれば、神は人類のために、「アジア人の一人として人となったご自分の独り子、救い主イエス・キリストをお遣わしになりました」。そして今、「アジアの教会は、神が最初から今日に至るまで働いていることに驚嘆しつつ、世界各地の教会とともに第三の千年期を迎えようとしています」。このことは、わたしたちにとっては大きな恵みであると同時に、挑戦でもありません。

### 第三の千年期はアジア宣教の時

大まかに言えば、キリスト教は最初の千年期にヨーロッパに根を下ろし、第二の千年期にアメリカとアフリカに広がりました。そして第三の千年期は、アジアに本格的に根を下ろすときだと言われているのです。

教皇様は、2000年を機に全世界の新たな福音宣教計画を打ち出され、アメリカ、アフリカ、オセアニア、アジアそしてヨーロッパ別の代表司教会議（シノドス）を開催して、具体的対策の検討を要請されました。そして、第三の千年期にさらに力をいれて宣教すべき地域は、世界人口の三分の二を占めるアジアである、と述べられたのです。

### 長崎とアジアの教会

聖フランシスコ・ザビエルはマラッカで初めて日本人と出会い、日本宣教を決意しました。1550年の夏に彼が平戸を訪れて以来、後続の宣教師たちが長崎県各地で信仰を広めました。その後聖フランシスコは、日本に多大な影響を与えた中国の宣教をめざしましたが、本土上陸を前に客死しました。

最初のキリシタン大名・大村純忠

は、1570年に長崎港を開き、1580年には長崎、茂木、浦上を教会に寄進しました。天正遣欧使節は、ローマへの往復時、マカオ、マラッカ、インドなどに立ち寄っています。原マルティノは長崎で司祭になってマカオで亡くなり、中浦ジュリアンはマカオで司祭になって長崎で殉教しました。

豊臣秀吉の朝鮮侵略（1592～1597年）の時強行連行されて来た5万人の高麗人のうちには長崎に住み着いた者もいますが、その高麗町では7千人余が受洗し、サン・ロレンソ教会を建てています。しかも、日本205福者のうち西坂で殉教した方々の中の10人は、高麗人だったということです。

17世紀前半から中国船が盛んに長崎港に出入りしましたが、キリスト教文書の搬入発覚が一つの理由となつて、中国人居留地がつくられなくなりました。彼らは、キリシタンでないという証拠に寺を建立しました。マニラの信徒ルイス・ロレンソは長崎で殉教し、「聖トマス西と15殉教者」の一人として列聖されました。

キリシタン再発見後の1866年、プチジャン神父様は、第三代日本教区長に任命され、香港で司教に叙階されました。長崎の大神学生は、

め、偏狭な考えを捨てて互いに尊重し合うことは、キリスト者としての基本です。

長崎コレジオの神学生たちは、2年ほど前から、タイのある村で現地の信者さんたちと一緒に労働奉仕をしています。福祉委員会関連のグループは、アジアの国々を訪れ必要な援助をしています。信徒使徒職評議会は、一采募金によるアジア各地への援助も行っています。稲佐出身の烏山さんはフィリピンで養護施設を開設し、献身的に働いています。

長崎教区内のいくつかの小教区では、アジア司教協議会連盟が10年前に打ち出した真の教会共同体づくりのプログラムを、アジアの他の教会と連携しながら推進しようとしています。軌道に乗るにはまだ年月がかかるでしょうが、まずは司祭、シスター、信徒たちの理解とやる気が必要です。

今後は、アジアの教会と連携した教会活動が増えていくと思います。この長崎教区にも、単に来訪者をあたたかく受け入れ、お世話するだけでなく、これまでの長い歴史の中で培われてきたキリストの愛と平和のメッセージを、アジアと全世界に向けて発信していくときが訪れつつあるのではないのでしょうか。

C)で、1970年11月に発足しています。1995年の第六回総会には教皇ヨハネ・パウロ二世も出席され、創設25周年が祝われました。現在21カ国の司教協議会が加盟しており、日本もそのメンバーです。なおFABC総会は、これまでに七回開かれています。

Q. アジアの教会と言われても、何か遠い存在に感じられます。わたしたち長崎の教会との具体的なつながりについては、どのように考えたらよいのでしょうか。

A. 大司教様にご指摘くださっているように、昔から、日本とくに長崎の教会とアジアの教会との間には深いつながりがありました。

22年前にフィリピンのマニラで列聖式が行われた「聖トマス西と15殉教者」たちも、フィリピン人を含むアジアの聖人たちです。西坂で殉教した人たちの中には、多くの韓国の方々も含まれています。

今こうした連帯の気運を盛り上げている「時のしるし」ともいうべきものを、1990年にインドネシアのバンドンで開かれた第五回FABC総会の最終声明「アジアの教会」は、こんな表現で指摘しています。

「これらの運動は、共同体、しかも人を受け入れる共同体を築き上げようという熱意の点で共通しています。障壁を築いて人為的に境界を強化する共同体ではなく、境界

を越え、壁を取り壊していこうと努める共同体を熱望しているのです。」

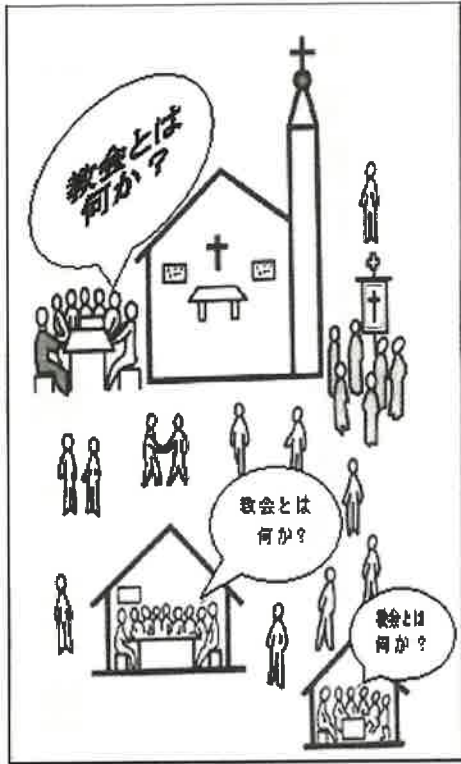
この、壁を越えようとする共同体意識を共有できたら、アジアはとて身近になるのではないのでしょうか。異質なものとの出会いが互いの心を開いていくということは、世界レベルも身の回りレベルも同じことだからです。それに加えて、自治体などが力を入れていくこともあるのですが、最近では、とくに韓国からはどんどん巡礼団がおし寄せて来ています。何でも、韓国側には年間2000人前後を送りたい意向があるようです。

その背景には、アジアにおける長崎の特別な使命を、わたしたち教会内部と同様あるいはそれ以上に意識する方々が、長崎全体に増えているという事実があるようです。

それは、長崎が原爆の被害を受けた最後の都市であることや、多くの殉教者を出した聖地であることなどが根拠となっているようです。被爆と殉教とは同じ「死に景色」に見えるかもしれないが、被爆が死の同心円を描くのに対して、殉教は死と見えて実は人間開花、つまりいのちの同心円を描きます。

いのちのまなざしが期待されつつあるいま、長崎の持つ日本全体やアジア諸国に向けての使命の重要性が浮かび上がりつつあるように思われます。





力をしなければなりません。  
また、若者が教会へ近づくようになるにはどうすればよいのだろう、「信仰と生活の一致」をめざすためには何をどう改善すればよいのだろう、信徒が社会的活動に関心を持つようになるにはどうすればよいのだろう・・・など、さまざまな問題と真剣に対峙しながら、一歩ずつ改善していく必要があります。

**4. 改革に対するさまざまな反応**  
何らかの変更を行おうとする際には、賛成意見と反対意見とが必ず出てくるものです。  
公会議後の教会における信者間の意見の衝突も、実に激しいものがある。ほとんどの人が、現状を維持

することをいし維持しながら少しずつ変更していく道を選びたい。教会内の改革の場合には、信徒であれば、自分たちはこれまでだまされ続けてきたのかという不信感を抱く人も出てくるかもしれないし、聖職者であれば、これまでの自分たちの指導が間違っていたのではな

かという不安を抱き、自信をなくしてしまう可能性もあるでしょう。

そこで大切になるのが、「見極め」です。この改革を進めていけば教会ははたして改善されるのかどうかについての見極めを、できれば当事者全員で行うことです。そして、もし肯定的な結論が出されたならば、一致協力しながら、その実現へ向けて一歩ずつ進んでいくことです。

**5. 長崎教区の歩み**

公会議後の教区や教区内の小教区の「自覚化」に大きく貢献したものの一つに、クルシリオ運動があります。他のほとんどの教区では開催が中止されてからすでに久しいようですが、私

たち長崎教区では毎年数回ずつ開催され続け、すでに数年前に第100回を終えました。今では開催されるたびに、各小教区で参加者を募るために、クルシリスタではない人を探すのに苦労している状態のようです。

神学講座の開催も画期的な出来事でした。公会議後まもなく長崎教区の福音宣教の中心基地として建設されたカトリックセンターを最初から活用し始めたのが、この神学講座でした。最初の修了者が出てから30年以上たった現在は、ほとんどの小教区のカテキスタの役目をその修了者たちが担当している、という状況にもなっています。

信徒使徒職評議会や婦人会などの活躍も信徒の「自覚化」に大いに貢献してきましたが、新しい大司教様をいただいた今、私たち教区民は、心を一つにして、さらなる「自覚化」の道を歩き始めようとしています。

次回は、第五のタイプの教会像として、「小共同体中心の教会」について考えていきたいと思えます。

が自然環境を容易に復元できないほど破壊してしまい、未来の人類が神の与えたものを深刻に損なわれた形でしか受け取れないようにするというのは、未来世代への正しい引き継ぎという重要な課題をないがしろにすることで、人類に対する神の救いの計画への妨害さえ意味しえよう。

### 現代世界はどう対応？

未来世代への加害問題が自覚されて以来、状況改善の真剣な取り組みはあちこちで行われてきており、現在も継続中である。さまざまな計画もある。状況の改善も見られ始めた。

例えば、有限な埋蔵資源に依存しないで、太陽エネルギーを用いようと工夫する努力がある。また、エネルギーと資源を循環的に利用する方式に改めようとするものがある。埋蔵資源などを循環的に使って、未来世代と同じ物質を再利用できるようにするという。地球の生態系の自然老化もあるので完全な循環はできまいが、できる範囲でやろうという。また、各種の地球温暖化対策がある。他にもい

ろいろ提案があり、中にはすでに実行されているものもある。

しかしこれらは、基本的に同じ姿勢のものであることが注目される。問題をただ技術的に解決しようとし、危機を技術開発で乗り切ろうという姿勢である。エネルギーの消費効果を高めるとか、環境が保護されるような新しい技術を開発するとか、いずれもできるだけ経済成長を犠牲にしない、という態度である。少なくとも未来世代に現代世代と同じ選択の幅を残すように気をつけながら、すなわち未来への加害でなく未来に現代との共存を許しながら、現代世代がなお自分の欲望充足を追求し、成長や進歩を目指すことが可能であるように、という考え方で一貫しているのである。

### カトリック教会の定番

カトリックの信仰の価値観から見ても、万人の人格の尊厳にふさわしい生存は、重要な基本的要求であり、これに必要な生活の質や文化水準の向上を可能にする経済成長の意義は大きいので、このように経済成長を犠牲にしないで資

源枯渇・環境破壊を食い止め、未来世代への加害を防ぐという工夫の正当性は、一定の限度内では当然認められる。

しかしカトリック教会には、この現代の問題に関して、固有の貢献責任があると思われる。それは、この問題解決には「人間は自己の欲望を制御する必要があり、欲望を際限なく肥大させるのは自滅を招く」という真理の自覚こそがまず求められることを現代社会に訴える、という責任である。

資源枯渇や環境破壊も、どのつまりは、近代人が進歩した科学技術を手に、自己の無限に肥大する欲望の充足に血眼になって開発・発展を目指した結果が引き起こしてしまったものである。創造主である神に地球の管理を委ねられている人類が、これを完全に自己の支配下にあるものと勝手に思いこみ、欲望をエスカレートさせながら寡奪をほしのままにしていた愚行が招いたものである。

人間の欲望は理性でふさわしく制御され、その支配下に正しく機能すべき定めのもとに神から与えられているのであり、暴走すること人間を破滅に導く危険があること

を、人類は啓示によつて教えられている（創世記11章）。現代世代が未来世代の生存を脅かしているという事実には、歯止めのかからないエゴイズムに駆られ無限に肥大する生活の快適への欲望の充足を求めて突っ走っていく人類は自滅の危険がある、との警告の意味があるのかもしれない。

進歩主義と成長至上主義、そして科学万能主義に毒され、技術、学問、社会制度の向上によつて未来世代は自分たちよりもずっと幸福になれる、と無邪気に信じこんできたわれわれ現代世代は、問題の真の解決には、経済成長と現世的生活の快適の向上という至上目標はそのままにして技術の改良・向上に努める、という方式では不十分で、まず、自分たちのエゴイズムと欲望の制御という禁欲の重大な課題があることを、心底から真剣に受け止めてかからねばならないのである。





して、煙突という煙突に見張りをおくこともできるでしょう。でも、たとえサンタさんが降りてくるのを目撃できなくても、それが何の証拠になるでしょう。だれもサンタさんを見ていないからといって、それがサンタさんがいない証になると言つのでしょうか。この世で最もたしかな真実は、子どもも大人も目にするのができないものです。あなたはこれまでに妖精たちが草原でダンスを踊っているのを見たことがありませんか。もちろんないと思います。けれど、だから妖精など存在しない、と言えるのでしょうか。この世界にいる、姿がなく見ることができない不思議なものを、すべて思いついたり勝手にでっちあげたりできる人間などいないはずですよ。

赤ちゃんのガラガラを分解して、どんな仕組みで音が鳴っているか、中身を調べてみることはできるでしょう。しかし、目に見えない世界をおおっているブエールは、一番の力持ちでも、たとえこれまで存在したあらゆる力持ちが集まっても、引き裂くことはできません。信仰と、詩と、愛情と、ロマンスだけが、そのカーテンを開き、その向こうにある、言葉にできないほど美しく素晴らしいものをかいま見せ、その姿を描き出してくれるのです。

それはすべて本当のことか？ ああ、ヴァージニア。この世で、それほど真実で永

遠に変わらないものはありません。

サンタさんがいない！ やれやれ！ サンタさんはちゃんとして、そして永遠に生きています。今から千年の間、いやヴァージニア、それどころか、一万年のさらに十倍だつて、サンタさんは子どもたちの心を喜びで満たし続けてくれるでしょう。

クリスマスキャロル

「サンタさんっているんですか」

〈野上絢・訳〉より引用

ヴァージニアの質問から、早や1000年以上の歳月が流れました。そして世界はますます即物的傾向が進んでいるように見えます。

こんな時代だからこそ、この社説の「そう、ヴァージニア、サンタさんは確かにいます。愛や思いやりや献身が確かに存在するのと同じように」ということばは、とくに新鮮な味をかもし出しているのでしょう。

この社説を書いたのは、フランシス・ア・チャーチ（1839—1906）という記者です。かれは1906年に亡くなりましたが、最後までこの社説は自分が書いたものだとは言わなかったし、新聞社も公表はしなかったといわれています。

サンタクロースの起源は、四世紀の聖人・

聖ニコラス司教にあると言われています。今のトルコに住んで、貧しい子どもたちにとプレゼントを配っていた、というその愛の実践のうわさが広がり、しだいに伝説的物語を生んだもののようなのです。

この話が移民とともにアメリカにも伝えられ、「セントニコラス」の愛称となり、さらに「シンタクラウス」などのなまりとなつてから、「サンタクロース」となつたと伝えられています。

しかし、クリスマスの意味はあくまでもイエス・キリストの誕生にあります。このことを常に中心に据えることよつて初めてサンタクロースの物語も意味を持つものとなる、のは言うまでもありません。



# エキュメニズム・ 諸宗教委員会



エキュメニズム・諸宗教委員会は、プロテスタント諸宗派および諸宗教との交流を進めながら、それぞれの宗派・宗教の相違を尊重して共に歩みを進める、平和共存の生きた証しとなることによつて、世界の福音化に奉仕することを目指しています。

去る11月25・26日に浦上天主堂とカトリックセンターとを会場にして第25回世界連邦「平和促進全国宗教者長崎大会」が開催されましたが、本委員会はそのお手伝いをさせていただきました。

この大会は、世界連邦日本宗教委員会主催、長崎県宗教者懇話会とカトリック長崎大司教区の共催、という形で開催されたものでしたが、本委員会が現在取り組んでいる活動には、次のようなものがあります。

## 1. 「長崎県宗教者懇話会（長崎宗懇）」

1969年に長崎県の外郭団体として「長崎県明るい社会づくり運動推進協議会（明社）」が発足したのがきっかけで、その宗教部会として生み出

されたものです。

この懇話会は、その名のとおり、団体であるか個人であるかを問わず、主旨に賛同する宗教者が自由に懇話しながら、社会に貢献する活動を進めようとするものです。

各宗教・宗派の境を超え、それぞれの違いを何よりも尊重し合いながら、共生の精神を大事にし、一つとなることを基本理念としています。なぜなら、世界は異質なものの共生の場であるからです。違つて一つとなるべき場だからです。

今回の「世界連邦」の名をかかげた大会も、単なるスローガンではなく、実際に具体的な共生の形を持った自分たちの姿を世に示す機会にしようという思いを込めて取り組んだものです。

年間の恒例行事としては、原爆殉難者慰霊祭（8月8日）、広島宗教者平和交流会（2月）、ハワイ・アリゾナ記念館での戦没者慰霊祭や平和祈念式典への参加などがあります。今年7月に起こった種本駿若殺害事件に対しても、マスコミ各社に宗教者としてのメッセージを発信しました。

## 2. 「部落解放にとりくむ」

### 長崎県宗教教団連帯会議（長崎解宗連）」

「長崎解宗連」は、部落差別をはじめとする一切の差別を解消することを目的として、その主旨に賛同する宗教教団によつて、1999年6月に結成されました。カトリック長崎大司教区も当初からその運動に参加しており、現在は本委員会が

窓口となつてその任に当たっています。

## 3. 教会一致促進活動

1月のキリスト教一致祈禱週間に対応するもので、今年にはカトリック中央協議会からポスターとパンフレットを取り寄せて各小教区に配布し、運動への認識を促しました。長崎でもまたキリスト教他教団との「合同祈禱会」が再開されるよう働きかけていけたら、と願っています。

## 4. 「かくれキリシタン」対応

専門家の結城神父様のご指導をおおきながら、各々の地区で特色を生かした対応をしていく道を探っています。現在は、黒崎、根獅子（紐差）、桐生月などでその動きが見られます。

委員会としては、今後は役割分担をして、それぞれの部会に専任者を当てたうえで、修道者や信徒の協力を求めながら活動を深めていけたらと希望しています。



Catholic Archdiocese  
NAGASAKI